

燕市農業委員会「農地等の利用の最適化の推進に関する指針」

平成31年4月26日 制定

令和6年3月28日 改正

燕市農業委員会

第1 基本的な考え方

農業委員会等に関する法律（昭和26年法律第88号。以下「法」という。）の改正法が平成28年4月1日に施行され、農業委員会においては「農地等の利用の最適化の推進」が最も重要な必須業務として、明確に位置付けられた。

燕市においては、信濃川をはじめとする中ノロ川、西川など「豊かな水」に恵まれ、その立地条件を活かして水稻を主体とする農業生産と、中ノロ川の河川敷等を中心に果樹や野菜の生産及び施設園芸の導入により、通年就農に積極的な取り組みが行われている。また、圃場整備された地域では、法人化された農業生産組織への農地の集約化が進み、効率的な土地利用が図られている。

近年、気象変動の影響による農産物の品質低下や米価の下落、農業者の高齢化、後継者不足に伴う経営規模縮小や離農する経営体の増加による遊休農地の発生が懸念されていることから、担い手への農地利用の集積・集約化を図るため、「地域計画」（農業経営基盤強化促進法等の一部を改正する法律案（令和4年法律第56号）による改正後の農業経営基盤強化促進法（昭和55年法律第65号。以下「改正基盤法」という。）第19条第1項の規定に基づき、市町村が、農業者等の協議の結果を踏まえ、農業の将来の在り方や農用地の効率的かつ総合的な利用に関する目標として農業を担う者ごとに利用する農用地等を表示した地図などを明確化し、公表したものをいう。）に基づいて農地中間管理事業を活用した利用調整に取り組んでいく必要がある。

以上のような観点から、地域の強みを活かしながら、活力ある農業・農村を築くため、法第7条第1項に基づき、農業委員の担当地区ごとの活動を通じて「農地等の利用の最適化」が一体的に進んでいくよう、燕市農業委員会の指針として、具体的な目標と推進方法、目標の達成状況に対する評価方法等を以下のとおり定める。

なお、この指針は、基盤法第5条第1項に規定する新潟県の農業経営基盤の強化の促進に関する基本方針及び基盤法第6条第1項に規定する燕市の農業経営基盤の強化の促進に関する基本構想を踏まえた農業委員会の長期的な目標として10年後に目指す農地の状況等を示すものであり農業委員の改選期である3年毎に検証・見直しを行う。

また、単年度の具体的な活動については、「農業委員会による最適化活動の推進等について」（令和4年2月2日付け3経営第2584号農林水産省経営局長通知、令和4年2月25日付け3経営第2816号農林水産省経営局農地政策課長通知）に基づく「最適化活動の目標の設定等」のとおりとす。

第2 具体的な目標、推進方法及び評価方法

1. 遊休農地の発生防止・解消について

(1) 遊休農地の解消目標

	管内の農地面積(A)	遊休農地面積(B)	遊休農地の割合(B/A)
現 状 (令和5年3月)	5,490 ha	1.0 ha	0.02 %
3年後の目標 (令和8年3月)	5,460 ha	1.0 ha	0.02 %
目 標 (令和10年3月)	5,440 ha	1.0 ha	0.02 %

※管内の農地面積は、耕地及び作付け面積統計における耕地面積。

※遊休農地面積は1.0haを継続する。

(2) 遊休農地の発生防止・解消の具体的な推進方法

①農地の利用状況調査と利用意向調査の実施について

- 農業委員による農地法（昭和27年法律第229号）第30条第1項の規定による利用状況調査（以下「利用状況調査」という。）と同法第32条第1項の規定による利用意向調査（以下「利用意向調査」という。）の実施について協議・検討し、調査の徹底を図る。それぞれの調査時期については、「農地法の運用について」（平成21年12月11日付け21経営第4530号・21農振第1598号農林水産省経営局長・農村振興局長連名通知）に基づき実施する。

なお、従来から農地パトロールの中で行っていた違反転用の発生防止・早期発見等、農地の適正な利用の確認に関する現場活動については、利用状況調査の時期にかかわらず日常的に実施する。

- 利用意向調査の結果を踏まえ、農地法第34条に基づく農地の利用関係の調整を行う。
- 利用状況調査と利用意向調査の結果は、速やかに農業委員会サポートシステムに反映し、農地台帳の正確な記録の確保と公表の迅速化を図る。

②農地中間管理機構との連携について

- 利用意向調査の結果を受け、農家の意向を踏まえた農地中間管理機構への貸付け手続きを行う。

③非農地判断について

- 利用状況調査によって、再生利用が困難と区分された農地については、現況に応じて速やかに「非農地判断」を行い、守るべき農地を明確化する。

(3) 遊休農地の発生防止・解消の評価方法

遊休農地の発生防止・解消の進捗状況は、遊休農地の割合により評価する。

単年度の評価については、「農業委員会による最適化活動の推進等について」に基づく「農業委員会の農地利用の最適化の推進の状況その他事務の実施状況の公表」のとおりとする。

2. 担い手への農地利用集積・集約化について

(1) 担い手への農地利用集積目標

	管内の農地面積(A)	集積面積(B)	集積率(B/A)
現 状 (令和5年3月)	5,490 ha	4,141 ha	75.40 %
3年後の目標 (令和8年3月)	5,460 ha	4,368 ha	80.00 %
目 標 (令和10年3月)	5,440 ha	4,896 ha	90.00 %

※管内の農地面積は、耕地及び作付け面積統計における耕地面積。

※担い手への農地利用集積率の目標は90%を継続する。

(2) 担い手への農地利用の集積・集約化に向けた具体的な推進方法

①「地域計画」の作成・見直しについて

- 農業委員会として、集落地域ごとに人と農地の問題を解決するため、「地域計画」の作成と見直しに参画する。

②農地中間管理機構との連携について

- 農業委員会は、市、農地中間管理機構、農業協同組合と連携し、(ア)農地中間管理機構に貸付けを希望する復元可能な遊休農地、(イ)経営の廃止・縮小を希望する高齢農家等の農地、(ウ)利用権の設定期間が満了する農地等についてリスト化や、「地域計画」の作成・見直し、農地中間管理事業の活用を検討するなど、農地の出し手と受け手の意向を踏まえたマッチングを行う。

③農地の利用調整と利用権設定について

- 管内の農地利用の状況を踏まえ、担い手への農地利用の集積が進んでいる地域では、担い手の意向を踏まえた農地の集約化のための利用調整・交換と利用権の再設定を推進する。

④農地の所有者等を確認することができない農地の取り扱い

- 農地の所有者等を確認することができない農地については、公示手続きを経て農地中間管理機構を通じて利用権設定ができる制度を活用し、農地の有効利用に努める。

(3) 担い手への農地利用の集積・集約化の評価方法

担い手への農地利用の集積・集約化の進捗状況は、農地の集積率により評価する。
単年度の評価については、「農業委員会による最適化活動の推進等について」に基づく「農業委員会の農地利用の最適化の推進の状況その他事務の実施状況の公表」のとおりとする。

3. 新規参入の促進について

(1) 新規参入の促進目標

- 目標年度の令和10年3月までに、毎年1名(法人)の新規参入を確保する。

(2) 新規参入の促進に向けた具体的な推進方法

①関係機関との連携について

- 県及び全国の農業委員会ネットワーク機構、農地中間管理機構等と連携し、管内の農地を借り入れる意向のある認定農業者及び参入希望者(法人を含む。)を把握し、必要に応じて現地見学や相談会を実施する。

②新規就農フェア等への参加について

- 市、農業協同組合等と連携し、新規就農フェア等に積極的に参加することで、新規就農希望者の情報収集に努め、新規就農の受入れとフォローアップ体制を整備する。

③企業参入の推進について

- 担い手が不足している地域では、企業の農業参入も地域の担い手確保の有効な手段であることから、農地中間管理機構も活用して、積極的に企業の参入の推進を図る。

④農業委員会のフォローアップ活動について

- 農業委員は、新規参入者(個人、法人)の地域の受入条件の整備を図るとともに、後見人等の役割を担う。

(3) 新規参入の促進の評価方法

新規参入の促進の進捗状況は、新規参入者(個人、法人)の数により評価する。
単年度の評価については、「農業委員会による最適化活動の推進等について」に基づく「農業委員会の農地利用の最適化の推進の状況その他事務の実施状況の公表」のとおりとする。

第3 「地域計画」の目標を達成するための役割

燕市において作成された「地域計画」に基づき、農地を効率的かつ総合的に利用していくため、燕市農業委員会は次の役割を担っていく。

- ・ 日常的な農地の見守りによる農地の適正利用の推進及び確認
- ・ 農家への声掛け等による意向把握
- ・ 「地域計画」で位置付けられた担い手への農地の利用調整やマッチング
- ・ 農地中間管理事業活用の働きかけ
- ・ 「地域計画」の定期的な見直しへの協力